

# T. S. エリオット と ハーバート・リード

糸 藤 洋

*Es irrt der Mensch, so lang' er strebt.*—Goethe

## 1

現代英米詩壇の山脈の一つを、「パウンド・エリオット派」(Pound-Eliot School) と呼ぶことがあるが、それになぞらえて、二十世紀の英国批評文学の巨大な流れを、仮に「ヒューム・エリオット派」と名付けても、両者の血縁関係から見て、さして不当ではあるまい。しかし、ヒュームやエリオットの一派が、その声を挙げはじめた頃には、この二人のほかにも、もう一名リードを加えて、「ヒューム・リード・エリオット グループ」とでも称した方が、よりふさわしかつたかもしれない。それというのも、主知主義と呼ばれている、彼らの新しい批評態度は、エリオットの *The Sacred Wood* (1920) や、ヒュームの *Speculations* (1924) 等によつて闡明され、エリオットを主幹とする *The Criterion* 誌によつて、その地歩を固めたのであるが、*Speculations* は、第一次大戦に陣没したヒュームの遺稿を、リードが編集、刊行したものであり、当時における彼ら相互の親近の程もしのばれるからである。

事実、リードが讚美する詩人の中には、パウンドもエリオットも含まれていたし (*Annals*, p. 101 参照)<sup>1)</sup>、又彼はエリオットを 'best friends in criticism' (*Form*, p. 8)<sup>2)</sup> の一人に数えていたこともあるが、その後、四半世紀以上の歳月を経過して行くうちに、この二人の批評家の距離は次第に開き、今や、両極端にあつて対峙しているかに見える。リードにとつて、エリオットはパーソナルな意味で親友ではあるにしても、もはや、主義・主張を共にする同志ではありえない。H. W. ホイザマンも、両者の離間を指摘している。(H. Treece ed.: *Herbert Read*, pp. 55-57 参照)<sup>3)</sup>

エリオットが、*After Strange Gods* (1934)<sup>4)</sup> の中で、リードを 'heresy' として槍玉に挙げたことは広く知られているが、リードの方でも、アングロ・カソリックへの改宗以後のエリオットは、「許し難い誤謬」(Treece: *op. cit.*, p.

56) を犯しているとさえ考えるようになった。すなわち、エリオットが 'Religion and Literature' (1935) で宣言したような批評基準は、'irrelevant prejudice' (*Voice*, p. 272 参照)<sup>5)</sup> にほかならぬというのである。ところが、エリオットに言わせれば、リードが文学批評の拠り所としたような心理学は、文学には無縁 (alien) な学問の一つにすぎない (*Selected Essays*, p. 347 参照)<sup>6)</sup> ので、「現代人の心をひとしく悩んでいる、さほど深い意味があるとは思えない心理学」(「エリオット選集」、vol. 1, p. 276)<sup>7)</sup> などと、あつさり片付けられてしまっている。

エリオットの 'general point of view' は、「文学においては古典主義、政治においては王党派、宗教においてはアングロ・カソリック」という、今更引合いに出すまでもない有名な言葉に、端的に表明されている。これは、しかし、あまりに明白すぎて、却つて、私達を戸惑いさせる言葉でもある。エリオット自身も、「この言葉が気軽に引用されているので、このままでは、この言葉は誤解されかねないことが私にもわかつてきた。」(*A. S. G.*, pp. 27-28) と懸念しているので、その意味内容については、軽率な受け取り方をしないように注意しなければならないが、しかし、ひねくり廻しすぎても、却つてエリオットの真意から外れてしまうのではあるまいか。「これは、外部の世界のことよりも、私自身の心のうちを示しているのだ。」(*A. S. G.*, p. 28) という彼の指示から逸脱しないように受け取りさえすれば、それが現在にいたるもなお、エリオットの基本的な立場であると見做して差支えあるまい。そして、それはまたヒュームの思想の延長線上に位置づけられるものでもある。勿論、エリオットはヒュームに学び、それを祖述したにすぎないという意味ではない。彼はそのような垂流ではないのだが、この二人の間には、たしかに思想的な血脈が通じている。従つて、ヒューム・エリオットの線を基軸として、リードとの距離を測つてみれば、エリオットとリードとの離間の意味するものも把握しやすいのではないかと思う。

ところで、リードの方を見ると、エリオットの向うを張つて、「エリオットは王党派、古典主義者、アングロ・カソリックと称したが、それに対して、私は (エリオット同様、条件つきで)、アナキスト、浪漫主義者、無信仰者と称した

い。」(*Annals*, p. 101) と、これまた、自分の 'general point of view' を表明している。このような言葉に内在していることではあるが、それを敷衍すれば、そして、類型化に伴う危険に目を閉じて、大胆な言い方をすれば、この二人の間に存在する対称点は更に数多く指摘できるように思う——エリオットが性悪説に傾き、彼岸の救いにあこがれる諦観の人であるに反し、リードは性善説を信じて此岸に立つ実践の人であるとも言えようし、前者は人間の運命について、悲観的な言辞を弄しながら、それを越えた境地に辿りつく（と彼の信ずる）道を示すのであり、後者は一見 オプティミストではあるが、ペシミズムの脅威にさらされているとも考えられる。ヘブライズムか、ヘレニズムかといった見方をすれば、エリオットは前者の系譜の中でも、その嫡子たるカソリックの信仰に立ち、リードは後者の流れを掬むヒューマニストである。さきに、エリオットは、ヒュームの思想の延長線上にあると言ったが、リードはその反対方向への延長線上にあるという見方も出来よう。

ここには、少々殊更らしいが、古めかしい東洋の匂いをおびた言葉遣いもある。しかし、それは、何処においても、如何なる時代にあつても、人間に迫つてやまない問題——「如何に生きるべきか」——に答える異つた途を、二人の批評家が夫々に歩んでいるさまを、ひそかに物語るのである。してみると、エリオットとリード、この二人の関係を survey するについても、すべて文学の問題がそうであるように、普遍的な人間の問題が孕まれているのであり、存外に深いところから解明してかからなければ、十分なものとは言えないであろう。尤も、このように大上段に振りかぶつてみたところで、それに自信をもつて答える力量のないことは、十分承知の上であるが、問題の深さは、絶えず念頭において筆を進めたいと思う。

註 1) Herbert Read: *Annals of Innocence and Experience*, Faber, 1946.

以下、本書は *Annals* と略記する。

2) Herbert Read: *Form in Modern Poetry*, 1932. (南雲堂翻刻版)

以下、本書は *Form* と略記する。

3) H. W. Häusermann: 'The Development of Herbert Read', *Herbert Read*, ed. by Henry Treece, Faber, 1944.

4) T. S. Eliot: *After Strange Gods*, Faber, 1934.

以下、本書は *A. S. G.* と略記する。

- 5) Herbert Read: *The Voice of True Feeling*, Faber, 1953.  
以下、本書は *Voice* と略記する。
- 6) T. S. Eliot: *Selected Essays*, 3rd ed., Faber, 1951.  
以下、本書は *S. E.* と略記する。
- 7) 弥生書房版「エリオット選集」全5巻。  
以下、本書は「選集」と略記する。手許に原書のないものは、本選集に依つた。引用の訳文についても、参照させて頂いた。

## 2

リードの浪漫主義は詩人としての彼にも、批評家としての彼にも、次第に色濃くあらわれてくるが、<sup>9)</sup> 現実処する彼の生き方がそれに関連している。彼が詩人の現代に生きるあり方として主張し、詩作においても自ら実践しようとした ‘detachment’——離れてものを見る態度——の原則が、次第にまもれなくなってきたのも、<sup>9)</sup> 彼の浪漫主義に由来する所が大きい。<sup>10)</sup>

「戦争を（正確に言えば、現代の戦争を）非難することが、詩人としての私の仕事ではない。私はただ、ある特定の事件の普遍的な様相を示したいと願うだけである。価値判断がそれに伴うかも知れないが、判断が詩作に先行したり、混同されたりしてはならない。」<sup>11)</sup> と ‘The End of a War’ の後書きの中で彼が述べた詩作の原則は、初期の詩の中では、まもられているようだ。しかし、試みに、彼の詩を年代順に通観してみよう。

He cannot shriek.

Bloody saliva  
Dribbles down his shapeless jacket.

I saw him stab  
And stab again  
A well-killed Boche.

This is the happy warrior,  
This is he……

——‘The Happy Warrior’ (*Collected Poems*, p.47)<sup>12)</sup>

第一次大戦の体験を通じて生れた、このような詩と、第二次大戦の心境をうたつた次のような詩との間には、たしかに、何かちがつたものがある。

Happy are those who can relieve  
suffering with prayer  
Happy those who can rely on God  
to see them through.

They can wait patiently for the end.

But we who have put our faith  
in the goodness of man  
and now see man's image debas'd  
lower than than the wolf or the hog.....

Wherere can we turn for consolation?

—'Ode written during the battle of Dunkirk, May, 1904' (C. P., p.91)

第二次大戦の凄惨な様相を前にして、リードの原則はゆらいでいるように見える。彼の戦争詩が「客観から主観へと大きく転回」<sup>13)</sup> したと言うことも出来ようし、嘗てリードがエリオットと歩調を合せて主張した「情緒のコントロール」(Reason, p. 28)<sup>14)</sup> ——'detachment'の基盤——がその力を失い、却つて、「情緒の弛緩」(S. E., p. 21)への傾斜を示しているとも見てよいであろう。

The kind of war is chang'd:.....

——'War and Peace' (C. P., p.81)

とリードは訴えているが、彼自身にも変化したものがある。第一次大戦と第二次大戦との間には、勿論大きなちがいがあつた。だが、「普遍的な様相を示したいと願うだけである」ならば、その差異をとり上げて訴える態度を表面に打ち出さなくても済んだのではあるまいか。詩人は、情緒の手綱をひき締めて、'detachment'の立場を保持してさえいれば、エリオットの言う白金の触媒として、詩の中に自我の退跡をとどめないでいることも、あるいは出来よう。エリオットの立場に立てば、それは可能であるかに見えるが、しかし、リードには、それは出来ないことであつた。そして、勿論、両者夫々に根拠や理由がある。ともあれ、リードは'escape from emotion' (S. E., p. 21)とは逆の方向に動く気配を見せているし、彼自身の体験や価値判断を積極的に詩の中に織り込むようになってきたので、エリオットの基準 (S. E., p. 20 参照) からすれば、凡庸な詩人に墮してしまふことになりそうである。

文学の場における、エリオットとリードとの距離の開きは、これでも推測出来よう。リードがこのように変つて行かざるをえないわけについては、別に一言書きとめておいた(註10及び11)が、更にそれが「人間の善に信をおく」と上掲の詩の中でも述べているような、浪漫主義的なヒューマニティへの信仰に支えられ、それと裏表になる反宗教的な立場——これも、その詩の中に示されている——に根ざしていることに注意しなければならない。そして、これは、

この面でエリオットに対比してみるることによつて一層明かになる。

そもそも、エリオットから見れば、人間の善良さなどは「神話」(『選集』, vol. 3, p. 191 参照) にすぎないので、リードのようにヒューマニティを信じることは到底出来ないのである。(S. E., p. 475 参照) しかし、人間性を信じる事が出来ず、そこに人間の矮少、邪悪を見たとしても、彼はリードのように「一体どこに慰めを求める事が出来るのだろうか。」と嘆いたりはしない。彼にはカソリックの信仰があるからだ。この問題は両者の宗教観の相違とも併せて考えてみなければならぬが、神への信仰をもつ者のみが、人間の悲惨をも、たじろがず直視しうるとは、エリオットがマキアヴェリを論ずる際にも力説したことである。かくてこそ、‘detachment’も保持出来ようが、ヒューマニティを信じ、あくまで現実に踏みとどまろうとするリードは、現実が危機的様相を帯びてくるにつれて、その重圧の影響を受けやすい。彼が‘detachment’の立場から足を踏み外すのも無理もない。

文学批評家としてのリードの初期の立場は、*Reason and Romanticism* (1926) に示されている。この評論集においても、彼はヒュームやエリオットのように、浪漫主義排撃に徹底しているわけではなくて、主知的な立場を確立しようとしつつも、理性と情緒——彼の比喩に従えば、‘head’と‘heart’——のディレンマに悩まされているが、(*Reason*, pp. 26-27 参照)、結局のところ、「文学とは主として情緒のコントロールである。」(*ibid.*, p. 28) と述べ、又客観的要素の導入によつて批評を情緒的鑑賞の水準以上に高めようとする運動に積極的に参加して、ヒュームやエリオットの同志であることを示している。

しかし、リードにあつては、それが精神分析学の成果を多分にとり入れることに発展して行くことになり、やがて、エリオットとは離れてしまう。勿論、リードも文学批評と心理学との混同を警戒してはいるが、(*Reason*, p. 85 参照)、フロイト、ユング等の心理学を通じて、彼は人間心理の深みにわけ入り、そこに芸術の湧き出る本源的な泉を見出すようになる。このような立場から、リードは「個性」(personality)の抑制ではなくて、その躍動流出を重視することになり、(*Form*, p. 30 参照)、詩とはすべて‘product of the personality’(*Form*, p. 18) であると言うに至つては、詩とは‘escape from personality’

(*S. E.*, p. 20) にほかならないと考えるエリオットから、きびしい反撃を加えられるのである。エリオットの、このような見解は、後程採り上げるヒュームの考えに連り、「一人の作家が独創という点で寄与しうることは、実に僅少にすぎない。」(*A. S. G.*, p. 24) といった人間の可能性への悲観的な評価に由来するのであるが、リードの主張は、それと正反対の観念に連る。リードが信を置く「人間の善」は、上掲の詩の示す限りでは倫理的な意味なのであるが、しかし、それのみにとどまらず、リードにとっては、美は善であり、又逆に、善は美である。<sup>15)</sup> 人間のうちに、すべてのよきもの、価値あるものがひそんでいるという浪漫主義的な人間観が、ここにその全貌を見せ、リードがヒュームやエリオットとは逆の方向を歩んでいることが、今や明かである。従つて、リードには「罪」の意識は稀薄であり、もしそれらしいものがあるとしても、「罪」とは、美が損われること、即ち、「俗悪」ということにすぎない。<sup>16)</sup> これは、勿論、宗教の問題と切り離すことは出来ないが、このような浪漫主義的、乃至は、ヒューマニスティックな態度は、エリオットからも、ヒュームからもはつきりと批判的の的にされている。

「浪漫主義者にとつても、近代のヒューマニストにとつても、悪の問題は消え去り、罪の観念も消えさつている。」(*S. E.*, p. 490) とエリオットはヒュームを引用しているが、ヒュームは更に能弁に、「あらゆる浪漫主義のもととはこれだ。——人間、個人、は可能性の無限の貯水池であつて、圧制的な秩序を破壊して社会を再編成すれば、この可能性にチャンスが与えられ、進歩が生じてくる。ところが、古典主義とは、これの正反対だと考えてよい。それによると、人間は極度に固定され、限定された動物であつて、その本性は、いつの時代にも、いささかの变化もない。何かまじなことが人間に出来るのは、全く伝統と制度とのお蔭である。」(*Speculations*, p. 116)<sup>17)</sup> と論じている。勿論、エリオットも、ヒュームも、この二つのうち後者の方を称揚することに意気投合しているのであり、(*S. E.*, pp. 490-491 参照)、伝統や制度を重視することも、この二人に全く共通である。一方、リードが、「個性」が自由に発揚され、芸術が栄える社会を目指して、独自のアナキズムを唱道し、社会の変革を叫ぶようになる所以も、既に、ヒュームの言葉のうちに見出されるのであり、その批判の

矢の赴くところに、現在のリードの立場はある。

このように、文学のルートも、掘り下げて行けば、人間観・宗教観・政治思想等と密接にからみつ合ってくるが、一応当面の問題——文学批評にたちかえり、てつとり早く‘head’と‘heart’のディレンマの線を辿つて、リードの近年の位置を探つてみるならば、*The Tenth Muse* (1957) では、‘head’をおとしめて‘heart’の肩をもち、知性偏重に傾く批評家を非難し、嘗ては批評の「理想」としたものを、「補助手段」にすぎないと格下げするなど、<sup>18)</sup>大きな変り方を示している。

この新しい立場にたつて、リードはペイターを論じ、「その驚くべき新しさ、その永続的な価値」(*ibid.*, p. 62)と讃辞を呈しているが、彼をも含めたヒューム、エリオット等のグループの、今世紀初頭における、主知的な批評態度樹立を目指す運動の第一歩が、ペイターからシモンズへと受継がれた傾向への批判に発していることを思い返すならば、隔世の感なきをえない。リードが、もはや、エリオットの同志ではありえない所以である。

註 8) “Romantic as I was, and am……” (*Annals*, p.80)という言葉も見受けられるが、それは自己の素質について述べているので、表現されたものを見れば、初期と現在とで色合いは可成異つている。

9) リードが現実に処する態度として、‘detachment’を志しながら、それを貫くことが出来なかつたことについては、「文芸と思想」Vol.17 所載の拙稿を参照。彼が詩作において、その立場を離れてきたことは、森清氏が指摘されている。「海潮音」Vol.16 所載の同氏の論考参照。

10) 浪漫主義といえば現実からの逃避ととられやすいが、リードの場合はそうではない。“Stay where you are.” (*Anarchy and Order*, p.61)と主張し、現実の社会生活から離れることは芸術家にとつて自殺にも等しいと信じる彼は、あくまでも現実と直接にとり組もうとする。それ故、エリオットにおけるカソリックの信仰のような緩衝物なしに、現実の重圧を直接に身に受ける。しかも、「苦悩する人間と、創造する精神とは別もの」(*S. E.*, p.18)というエリオットのような割り切り方がリードには出来ない。(註11参照) 世界大戦といつた危機が彼を大きく動かし、それがなまなましく詩作にも影響してくることになるのもそのためであろう。1930年以後のリードの変貌の原因について、ホイザマンが“First the impact of political situation.” (*op. cit.*, p.67)と云うのも、この意味で首肯出来る。

11) これは次のようなエリオットの言葉と軌を一にする。——「散文においては



理想を扱つてもよいが、詩においては actuality を扱うことが出来るだけである。」(A. S. G., p.30) しかし、リードにとつて問題であるのは、彼がこのような態度を貫徹出来ず、ディレンマに悩むことである。そして、このディレンマこそは、彼を発展或は変化させる根源的な力である。「文学批評家が同時に詩人である時には、彼はともすればディレンマに悩まされる。……彼は creative urge を感じ、それによつて自分の批評理論と何ら関係のない詩を書くことがある。……彼の理論と実践との間には、何とかして調和が樹立されねばならない。」(Form, p.1) とリードは述べているが、彼自らの体験と反映するものであろう。

12) Herbert Read: *Collected Poems*, Faber, 1953.

以下、本書は C. P. と略記する。

13) 上掲、森清氏の論考参照。(「海潮音」Vol.16, p.21)

14) Herbert Read: *Reason and Romanticism*, Faber & Gwyer, 1926.

以下本書は Reason と略記する。

15) Herbert Read: *The Meaning of Art*, 3rd ed., Faber, 1951. p.261— “Beauty is moral goodness.”

*Annals*, p.229— “Goodness is living beauty.”

16) *Annals*, p.229— “Vulgarity is the only sin, in life as in art.”

17) T. E. Hulme: *Speculations*, 2nd ed., Kegan Paul, reprinted 1954.

18) Herbert Read: *The Tenth Muse*, Grove Press, 1958. p.325— “Scientific method in criticism, in my creed, is only admissible as a secondary activity. The critic with a head but without a heart…… is the monster who killed Keats.”

Cf. *Form*, p.1— “……it [the method of scientific criticism] must remain the ideal of all criticism.”

### 3

前時代の思潮への批判といえは、それは、ヒュームによつてきわめて鮮明に示されている。尤も、*Speculations* には、それが体系的に展開されているわけではないが、彼の ‘general principles’ (*Coat*, p. 294)<sup>10)</sup> としては、‘discontinuity’ の原理、‘imperfection of man’ の観念を挙げる事が出来よう。

パスカルの影響のもとに、彼は実在 (reality) を三つの領域から成るものと見做し、それらの間には架橋不可能な深淵が横わり、相互に絶対的に隔絶したものと考へている。これが「非連続」の原理であるが、ルネサンス以後の多くの思想は、このような実在の本質の認識が十分でないために甚しい誤謬を犯し

ているとして、非連続の深淵にのぞんでたじろがず、この原理を十分に把握することが何よりの急務であるということから出発し、思想や芸術における新しいエポックの到来を告げたのがヒュームである。

さて、そのように、相互に独立した領域とは、①数学や物理的科学の対象である非有機的世界、②生理学、心理学、歴史等によつて取扱われる有機的世界、③倫理的及び宗教的価値の世界——であるが、そのうち①と③とは両極にあつて絶対的な性格をもち、その中間の②の世界、即ち、生命の関与する世界は‘a muddy, mixed zone’であつて相対的な性格をもつにすぎない。従つて、それを扱う学問も‘loose sciences’である。このような截然とした差異をわきまえずに混同することから、つまり、相対的なものの中に絶対的なものを混入したり、その逆を行つたりすることから、宗教においてはモダニズム、文学においては浪漫主義、倫理学においては相対主義、等々の「私生児的現象」が発生するのだと、ヒュームは口を極めて批判する。(Speculations, pp. 6-11参照)

このような見地からすれば、リードの人間観は全くの誤りだとされることになるであろう。というのは、それは「本来神的なものに属する完全性を人間的なものの中に導き入れ、両者を明確に分離しないで混同する」(ibid., pp. 32-33)ことになるからである。リードを念頭に置いたとは決して思われたい、この言葉の鋒先に、リード自らが立ち塞がったかたちになつてしまつたのである。ヒュームは、更に、「その基本的な誤謬から個性という忌わしいもの (that bastard thing Personality) が生れ、あらゆるたわ言がそれに続いてやつてくる。」(ibid., p.33)とエリオットの口吻そのままの言い方をさえしている。リードが次第にはつきりと打ち出して来た態度とこれとは、既にふれたように、いわば、性善説的なものと性悪説的なものとの対立であるが、事は人間的な次元に限られるのではなく、宗教的な問題にまで及んでくる。

ヒュームは、人間に本質的な不完全は、人間が「原罪」を負つているが故であると考へ、この点から、‘tragic significance of life’ と ‘futility of existence’ を認識することが、あらゆる偉大な宗教の源泉であり、人を宗教的態度——これに比すれば、他の如何なる態度も浅薄であると彼は評価する——に導く所以であると論じているが、これはボードレールの悪魔主義を評して、キリ

スト教に裏口から入ろうとする試みに他ならないという エリオットの 論を思い出させるのである。しかし、ヒュームはそこに差しのべられる 超自然的な救いの手に感泣する信仰者ではない。彼にとつては、それを知的に理解すること、又 ‘way of thinking’ (Hulme: *op. cit.*, p. 46) こそは第一義的な重要性をもつのであつて、あくまでも人間的な次元にとどまろうとする。この点では、却つてリードと同質であるとも言えよう。

エリオットにあつても、ヒューム的な知的色彩は濃い。ことに、初期においては、宗教的感情のあとは少しも見えないと E. M. フォースターも指摘している。<sup>20)</sup> だが、エリオットは、そこから決定的な一歩を進めて信仰告白をするに至つたのである。何が彼をこのように踏み切らせるにいたつたのであろうか。その要因の一つとしては、「死」の問題が考えられる。ヒュームの言う ‘imperfection of man’ を時間という側面で受けとめたともいえる。人は死すべきものだ。エリオットはこの認識こそ、西欧の全文化に浸潤しそれを支えているという見方をするが、しかも、それが、

At the moment which is not action or inaction  
You can receive this: “on whatever sphere of being  
The mind of a man may be intent  
At the time of death”……  
(And the time of death is every moment)

—‘The Dry Salvages’ (*Four Quartets*, p.31)<sup>21)</sup>

という言葉にも見られるように、刻々に具体的に迫つてくる痛切な問題として受けとられているのである。

リードも、勿論の、「死」問題に面をそむけているわけではない。彼が、‘terrible fragility of life’ を痛感したことの次第は *Annals* (pp. 107-108) にも記してあるが、彼はそれをストイシズム的な運命論でもつて、あくまで人間的平面で解決しようとする。それが彼にとつては当然の態度であり、ヒュームやエリオットのように人間の不完全や悪の認識から宗教へと導かれる途には、無縁であることも、今迄に見てきたことから明かである。リードにとつては、宗教的感情も、‘emotional stresses’ の産物としか考えられず、(*Anarchy and Order*, p. 122)<sup>22)</sup> それの解決手段としては芸術が強く打ち出されてくる。(Coat, pp. 298-299 参照) ともあれ、「私自身は、宗教の必要は感じていない。若い頃

に宗教的感情を経験したことをおぼえているが、それが過ぎ去つた後は、一層朗かに、一層幸福に感じている。」(Anarchy, p. 122) とリードは明言するのである。

エリオットにとっては、「死」がこの上もなく重大な意義をはらむものとして受けとられることに問題のカギがある。<sup>23)</sup> 彼の「反浪漫主義」は「生の与え得ないものを死に期待する」という ‘Catholic faith of disillusion’ を受け入れるまでに発展し (S. E., p. 275 参照)、あくまで「生」に期待するリードと対蹠点に立つ価値転換が行われる。その回転の軸が「死」の問題である。

ヒュームから、エリオットへと辿られる、このような救いへの途は、既に概観したように、人間のネガティブな面を見つめることから出発している。ダンテを論じて「人生や人間から、それらの与えうる以上のものを期待しないこと」(S. E., p. 275) と述べ、マキアヴェリ論で、「人間に人間以上の美德をかぶせない」(「選集」vol. 3, p. 190) というのが、エリオットの受け入れた「カソリック的幻滅の哲学」であり、彼の信仰の基調である。しかし、それは更に進んで、人間の暗黒面を強調することが、信仰を高める所以であるといつたことになりかねない。彼が「絶望こそは信仰の喜悦の前提であり、要素である」(S. E., p. 412) というときには、その気配が濃厚であるが、「生の与えないものを死に期待する」と言うに至つては、現実を、相対的なものであるにせよ、一歩でもより良くしようという意欲が生れて来ないのも当然である。

I said to my soul, be still, and let the dark come upon you,  
—‘East Coker’ (Four Quartets, p.19)

とか、それに続いて、再び、

I said to my soul, be still, and wait without hope  
For hope would be hope for the wrong thing; wait without love  
For love would be love of the wrong thing; there is yet faith,  
But the faith and the love and the hope are all in the wating.  
—(ibid., p. 19)

と言うエリオットは、まさしく彼岸の救いにあこがれるのみ、諦観そのものである。

Which shall be the darkness of God. — (ibid., p.19)

と ‘the dark’ を説明し、

So the darkness shall be the light, and the stillness the dancing.

—(*ibid.*, p.19)

とうたつてはいるが、これが彼一人の主観的な *illusion* に過ぎず、*disillusion* と化し去るものでなければ幸いである。

このような立場で人生に対して ‘*detachment*’ を保持し、芸術を生み出したとしても、それはそれなりの限定された価値をもつにすぎないのではあるまいか。「エリオットは思想を行動から遊離させ、人生から自分自身を遮断してしまい、何にもまして人生に意義があるということを否定してしまつている。彼の芸術は *Narcissism* の一形態である云々。」(大意) というラスキの批判<sup>24)</sup> は決して的外れではない。エリオットが、一貫した態度を持ち続けているとしても、他面、「ぼくのように、だんだん硬直し、形式的になりがちな一定のドグマチックな考え方によつてあらゆるものを裁断しようとする精神」(「選集」vol. 1, pp. 358-359) と自らも認める停滞性を免れえないのは、かような自己閉鎖性のゆえである。

これに対して、リードの主張は、“Stay where you are and suffer if you must.” (*Anarchy*, p. 61) である。それがヒューマニティへの信仰に支えられるとき、次のような実践への主張が生れる。

.....  
the ancient wisdom whispers:  
Live in action.  
——‘The Contrary Experience’ (*C. P.*, p.84)

Vision itself is desperate; the act  
Is born of the ideal.....  
.....  
....We shall act  
We shall build  
A crystal city in the age of peace  
——‘A World within a War’ (*ibid.*, pp.99-100)

しかし、リードの言う「理想」に対しては、これまた、きびしい検討が加えられなければならない。主観的にはその妥当性を確信しているにせよ、「アナキズム」に対して客観的な批判が加えられなければならない。彼の「アナキズム」が芸術と直結するものである以上、政治理論としての検討のみでなく、芸術の観点からの批判が肝要である。‘*detachment*’ から、ずり落ちようとして「アナキズム」に縋りついた結果、彼なりのドグマチックな態度に固定する懸念な

しとしない。詩人としてのリードが、その実践的態度のゆえに、すぐれているとも、成長してきたとも決して言えないのである。

ともあれ、リードが、ドン・キホーテの「悲劇」を免れるためには、「アナキズム」については言うまでもなく、彼の浪漫主義や人間観についても、今一度ヒュームにたち帰つて、そのきびしい批判に耳を傾けなければならない。ヒューマニストの 'naïveté' の行く手に何が待ち構えているかは、ヒュームが透徹した眼で見抜いたことである。

リードは、その道行きのゆえに、しばしば、'inconsistency' の譏りを受けて来た。(Coat の 'Preface' 参照) しかし、少くとも今迄は、それが彼の——発展とはいえないまでも——変化の原動力であつたことは否定出来ない。(註11参照)

註 19) Herbert Read: *A Coat of Many Colours*, revised ed., Kegan Paul, 1956.

以下、本書は *Coat* と略記する。なお本書からの引用は、その中の一章 'T. E. Hulme' (pp.294—299) に限られている。

20) E. M. フォースター:「恐怖と背景」、大竹勝編訳「エリオットの功罪」荒地出版社、p.22

21) T. S. Eliot: *Four Quartets*, 9th impression, Faber, 1952.

22) Herbert Read: *Anarchy and Order*, 1954.

以下、本書は *Anarchy* と略記する。

23) 安田章一郎:「エリオットと危機の問題」、矢本貞幹編「現代イギリス文明批評」、南雲堂、pp. 46—52 参照。

24) ラスキ:「信仰、理性、文明」、上掲「エリオットの功罪」p. 36 参照。

#### 4

エリオットとリード、嘗ては同一陣営に属していたこの二人の歩む途を辿れば、このように果しない平行線を描き、永久に交ることはないように見える。なまじ大上段に振りかぶつてみたばかりに、このままで何処まで進んでも結論のつけようはあるまいとの危惧に襲われるが、論者の不手際が、対比のために差異を極点にまでもつて行くといつた歪曲をしたのではないかとの懸念もある。これは、しかし、対立する立場を意識するとき、エリオットも、リードも犯しかねないことである、尤も、'heresy' とか 'alien or half-formed science' とか一語必殺の勢でやり込めてしまうエリオットに比すれば、リードの方がお

手柔かであるように感じられはするが。

リードは、エリオットの批評基準を 'irrelevant prejudice' と批判しても、「そのような批評も、それなりの価値をもっていることは否定しない。」(Voice, p. 272) と付け加えることを忘れないし、「シエレーの思想は、エリオット氏があびせかける嘲弄を受けるようなものではない。」(Voice, p. 217) とシエレーを弁護しても、「信念が問題とされない時は——例えばランダーやキーツの場合のように——エリオット氏と私との間には完全な一致があると思う。」(ibid., p. 217) と妥協点を見出す労をおしまないのである。

だが、リードも、思い切つた言い方をしないわけではない。たとえば浪漫主義と古典主義とを比較して、一方は 'inspiration, daring and originality' であるに対し、他方は 'derivation, conformity and timidity' であると断じるようなこともある。(Annals, p. 219) この点では、リードは、「これらの観念は一方に対して他方を擁護しようとする人が与えるような絶対的な価値をもっているのではない。」(A. S. G., p. 30) とか、「伝統という言葉そのものが、動くことを意味している。」(ibid., pp. 23-24) というエリオットの言葉を併せ考えなければなるまい。また、個性の躍動を強調する思想から、リードが、'divine madness of the poet' (Anarchy, p. 26) を称揚するときには、「人間は最も激しく興奮したときに、最もリアルであるとは決して言えない。」(A. S. G., p. 55) というエリオットが鎮静剤となるであろう。

しかし、この二人の関係は、一方の長を採つて他方の短を補えば、それで全きをうるといつたものでは決してない。人間観、宗教観にまで掘り下げて行けば、そのことは極めて明かで、真理は中間に存するといつた安易な考えが通用しない次元で、根本的な対立があるのだ。まことに、エリオットが言う通り、信仰者と無信仰者とは出発点が正反対なのである。(S. E., p. 408) エリオットをカソリックの信仰に導いた途も、リードを異つた方向につれて行く。「ヒューマニズム、浪漫主義、自由主義に対する、ヒュームの批判をすつかり受け入れても、一步でも教会に近づくことには決してならない。」(Coat, p. 298) という考えは、リードにとっては全く当然なのである。

平行線はやはり平行線だと、ここで再び気付かざるを得ない。この両者の距

離は、思索の途を辿る努力を続ける限り、知恵貧しい 'stray sheep' を悩すのであろうか。しかし——井蛙の見に過ぎないかも知れないが——視界をこの二つの途の対立に限定せず、大きく拡げてみれば、このような、そして、そのほかの多くの様々な対立を宿しながら、渾沌と見えつつも、人生そのものには、何らかのまとまりがあるようにも思われる。だが、それは、更に厄介な、手におえない問題を取り上げることになりかねない。そこで、もとに帰って、焦点を再びエリオットとリードとに絞ってみよう。すると、次のようなリードの言葉が目を惹くのである。——「幾多の相違・対立にも拘らず、また、それゆえにこそ、エリオットから多くのものを学び、絶えざる友情を結ぶことが出来たのであり、このことは是非とも一言記しておきたい。……このような自分達の友情は普遍的な意義をもつと思う、といというのは、従来、'ideological similarities' のみが、あまりに重要視されて、'human sympathies' が等閑視されているからである。人生は、身近なところでも、深奥なところでも、やはり、弁証法的なのである<sup>25)</sup>云々。」(大意) (*Annals*, p. 101 参照)

勿論、これは問題の解決では決してない。だが、この言葉から、各人各様の慰めと、励しとを、一応受けとつておいてもよいのではあるまいか。

註 25) リードにおける弁証法の観念については、広島大学英文学会「英語英文学研究」Vol.7, No.2 (1960) に小論発表の予定である。